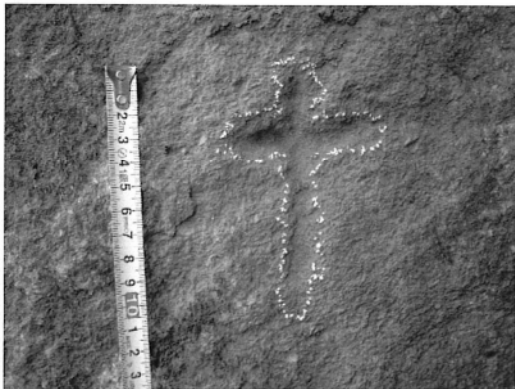




←
卍形
の
刻
印



↑ 2 種類
の
刻
印



↑ 富山城で最も多い十字形の刻印
大手石垣の星形刻印→



研究余話Ⅸ 富山市内最新の出土漆器について

近年、富山市内の沖積平野部の発掘調査で鎌倉時代から江戸時代の集落や城館遺跡で多くの漆器製品が出土した。この程、国内の遺跡出土の漆器に詳しい漆器文化財科学研究所の四柳嘉章所長にこれらの遺跡から出土した漆器について、多くのご教示をいただきましたので、含めてご報告させていただきます。

●水橋金広・中馬場遺跡（鎌倉～戦国時代・12世紀末～16世紀）

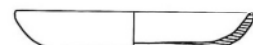
遺跡は南北約 500m の範囲に、大溝で区画された屋敷地に掘立柱建物や井戸、堅穴状遺構などが配置される館が形成されています。遺跡の北部～中央部は戦国～江戸時代前期を中心とした時期の遺構や遺物が検出されています。遺跡の南部は鎌倉～室町時代までの遺構や遺物が検出され、やや古い時期に館跡が形成されていました。

①12世紀末～13世紀初頭（鎌倉時代初期）の漆器
無紋の皿が出土しています。底部に高台が付かず、露胎（下地を塗っていたがはげた状態のもの）となっているのが特徴です。

②13世紀（鎌倉時代）の漆器 「桐+竹」の文



1



0 10cm



2

様(1)が両面に描かれた漆器は鎌倉で作られた可能性があり、非常に丁寧な作りです。佐助ヶ谷遺跡(神奈川)に類例があります。「亀甲に花角+竹」の文様(2)は非常に珍しい文様構成です。亀甲文は家紋などの意匠で使われることが多く、花角(かたばみ)は繁殖力が旺盛なことから吉祥文として用いられたようです。

③14世紀(鎌倉～南北朝)の漆器 無紋の椀があります。

④15世紀(室町時代)の漆器 朱漆の大椀は最上級の漆下地を用いて製作されたものです。口縁部は布着せを行い、端反りされており、金属器を模倣した製品の可能性があります。また、内面に薄く熱を受けた跡が見られ、蜀台に転用された可能性が高いです。この漆器は15世紀前半以前に製作されたものですが、漆器が出土した遺構は江戸時代の遺物が出土しています。このような高級品は伝世して何十年、百年以上使用されていた可能性があります。一般的な名主クラスでは入手できない製品であり、寺院や武将の館以上の施設で使用されていたと考えられます。類例として、福井県一乗谷朝倉氏館跡や岐阜県江馬氏館跡、新潟県水久保遺跡で出土しています。富山県では類例がありません。福光町梅原胡摩堂遺跡では多数の漆器が出土していますが、このような高級漆器は出土しておらず、漆器から見たら、同遺跡は一般的な集落遺跡と考えられます。文様がある漆器が1文で買えるとしたら、この製品は100文～数百文の値がある製品です。

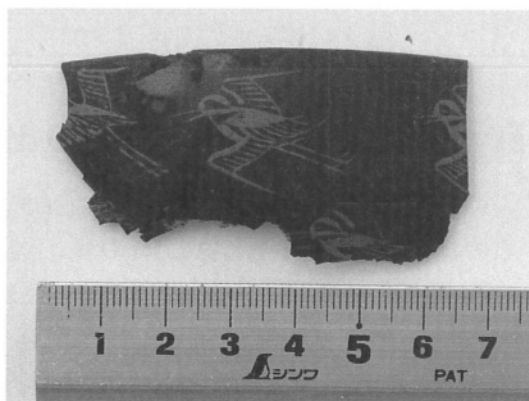
一方、井戸祭祀に用いられた無紋の漆器椀もこの頃(14世紀末～15世紀)の製品です。

⑤16世紀(戦国時代)の漆器 「四つ葉桔梗」の漆器があります。桔梗は五つか三つのものが多いのですがここでは四つ葉になっており、めずらしいものです。

水橋金広・中馬場遺跡出土の漆器は鎌倉～戦国時代までの中世の全般を通じて出土しており、越中のみならず北陸の漆器の変遷を知る上で大変貴重な資料です。(鹿島昌也)

●八町Ⅱ遺跡(鎌倉時代・14世紀)

八町Ⅱ遺跡では「千鳥文」が描かれた漆器が出土しました。これは北陸初の出土となります。鎌倉では蒔絵意匠を雑器に取り入れることは多く見られ、千鳥の文様も多く描かれています。それらの漆器は基本的に赤漆に朱が使用され、ベンガラが使われることはありません。今回出土した漆器は朱で描かれ、さらに鎌倉で見られる千鳥の文様(重要文化財「千鳥蒔絵面箱」13～14世紀、野村美術館蔵)に極めて類似していることなどから、県内ではなく、鎌倉で生産された漆器が搬入され、使用されたと推測されます。遺跡は14世紀頃、鎌倉から漆器を取り寄せて使用することのできる人々が暮らす拠点的な集落だった可能性があります。



●小出城跡(戦国時代・16世紀)

小出城跡では戦国時代の外堀・内堀あわせて約200㎡の狭い範囲から平成15・16年度あわせて約60点の漆器が出土しました。次頁の「菊花」が施された漆器(2)や「扇」に房と飾りとが揃って表現された漆器椀(1)は貴重な資料で、非常に丁寧に描かれています。

一方、漆器椀の高台部分のみを意図的に切断したものが出土しました。一部穴が開けられ、赤と黒の漆で塗り分けられ、塗りが上質なことから、高級な漆器椀を合子か香炉の蓋に転用したようです。また、高台裏面に「三ツ星文」が描かれた漆器が2点出土しました。うち1点は火を受けた痕跡がありました。漆器を廃棄する際、焼却することがあるようで

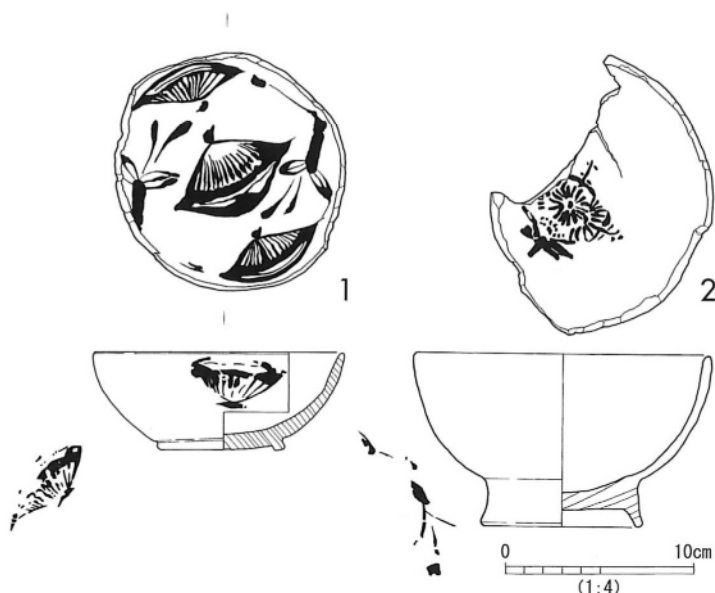
す。この漆器は形を保ったまま部分的に焦げ、小穴を開けていることから、碗以外に転用された可能性があります。

昨年度調査で「松」が描かれたほぼ同形の小皿が2点出土していました。今年度調査でも同じ「松」の文様が描かれた同形の小皿が1点出土しました。漆器皿は中世の普及食器である三ッ皿（組皿）と考えられます。

他にも、中央に簡略化された「鶴丸」を描き、その周りに「山」をイメージさせる文様が描かれた漆器が新たに出土しました。

また、「牡丹+扇」は他に類例がなく、「俵」、「鶴丸」、「笹」などいずれも吉祥を表す文様を施した漆器が多数出土しました。

小出城跡からは普及品である渋下地の漆器から、漆下地で塗りの精度が高い良質な漆器が出土しています。漆容器と考えられる曲げ物などが出土しており、城内に漆職人を招き、日常食器から高級漆器まで製作し、使用していたことが推測されます。（稲垣裕二）



研究余話X 地震と考古学について

鹿島昌也

（埋蔵文化財センター学芸員）

昨年9月、埋蔵文化財センター職員が新潟県十日町市立博物館を訪れ、免震装置に乗った国宝の火焰土器（縄文）を目にし、他の展示品と違う厚遇に感心していた。

その翌月、新潟県中越地震が発生し、この火焰土器が破損したとの新聞記事を目にした。免震装置の機能を上回る規模の地震によって、多くの文化財も被災した。

現地では地滑りや液状化現象がみられ、強い衝撃のあったことを示している。この液状化が注目され出したのは、奇しくも1964年東京オリンピック直前の日本列島を震え上がらせた「新潟地震」からである。

遺跡に残る地震痕跡

日本列島で、地震の原因となる活断層は各地に存在し、どこでも地震が起り得る。

遺跡を発掘すると、過去に発生した夥しい数の地震痕跡が検出される。小矢部市の若宮古墳では墳丘に小さな地滑りの痕跡が多く確認され、福岡町の木舟城の城下町では石組み井戸を引き裂いて噴砂の砂脈が確認されるなど、様々な現象が残されている。

地震考古学

（独）産業技術総合研究所関西地質調査連携研究体長の寒川旭氏にお聞きしたところでは、液状化が検出された場所に起る地震には数百～数千年単位の周期があるという。富山では1585年（天正地震）、1858年（安政の飛越地震）に液状化を発生させたM6級以上の規模の地震の記録がある。その周期を知っておけば現代の人々が生きてる間の富山は大丈夫だろう。遺跡で地震痕跡が発掘されたとしても無闇に恐れる必要がないと教えられた。